

## 国際交流講演会実施報告書

経営学部准教授 宮田憲一

日 時：2025 年 1 月 23 日（木）17:00-19:00

会 場：明治大学駿河台キャンパス、アカデミーコモン 8 階 308F 教室

講演者：ウィリアム・ラゾニック（William Lazonick, PhD）

マサチューセッツ大学ローウェル校経済学名誉教授

（Professor Emeritus of Economics, University of Massachusetts Lowell）

題 目：Business History and Economic Theory : Progressive Value Creation or Predatory Value Extraction?

言 語：英語（オンライン自動翻訳字幕を併用）

参加者数：109 名（対面 28 名、オンライン 81 名）

2025 年 1 月 23 日（木）17 時からアカデミーコモン 308F 教室（駿河台キャンパス）にて、マサチューセッツ大学ローウェル校（アメリカ合衆国）経済学名誉教授・産学研究ネットワーク会長のウィリアム・ラゾニック氏による講演会“Business History and Economic Theory : Progressive Value Creation or Predatory Value Extraction?”が実施された。講演会は英語で行われ、講義・質疑応答は、対面とオンラインを併用したハイフレックス方式で実施され、オンライン自動翻訳字幕も提供された。

ラゾニック氏は、エージェンシー理論批判の急先鋒として知られる経済学者であり、経営史、イノベーションの社会的条件、社会経済的な流動性、雇用機会、所得分配、先進国および新興国における経済発展など、多岐にわたる研究成果を発表し、シュンペーター賞やマッキンゼー賞を受賞するなど、企業組織論の研究をリードし続ける世界的な研究者である。近年は、「革新的企業の理論」を提唱し、企業がどのようにして持続可能な繁栄を実現できるかを探求し、注目を集めている。今回の講演では、シン氏との共著で 2020 年に出版され、2024 年 9 月には東洋経済新報社から訳書『略奪される企業価値』として刊行された近著 *Predatory Value Extraction* (Oxford: Oxford University Press) の内容を中心に、経済理論と実際の企業活動や歴史との間に見られるギャップを指摘しながら、現代経済における「持続可能な繁栄」の喪失と、その原因である企業の価値創造と価値収奪の不

均衡について論じていただいた。

講演では、戦後のアメリカや先進国は安定した経済成長を公平な所得分配を実現していたが、1970年代から持続的な繁栄は喪失し、1980年代以降、アメリカでは極端な所得格差が広がり、特に株主への利益配分が強調されようになったと指摘した。そして、この原因として、企業が、「持続的価値創出」のために利益を「保持して再投資」する活動から、「略奪的価値収奪」にむけて利益を「縮小して配分」する方針へと転換したことが、実質賃金の伸び悩みと生産性格差の拡大を招いたと論じた。

この方針転換の背景には、1980年代以降、株主価値最大化のイデオロギーが支配的になり、企業経営者に株価の上昇を最優先させ、実質的には短期利益の追求を助長したことにあるという主張がなされた。特に、SEC ルール 10b-18 が 1982 年に自社株買いを合法化して以降、その動きが加速したことで、株式市場は資金調達ではなく、利益収奪の手段へと変貌した。それがイノベーション投資や賃金上昇の停滞にいたったと批判した。実際、2014～2023 年の間に S&P500 企業は総利益の 57%を自社株買い、41%を配当に費やしていると指摘した。

こうした分析を踏まえて、これからの企業は「革新的企業の理論」に基づき、内部留保を再投資して技術革新を進め、労働者や消費者に公平に利益を分配するとともに、企業統治の見直しが必要であると論じた。加えて、新古典派経済学が企業の価値創造を軽視していると批判し、「市場の神話」を捨て、企業の内部資源配分に着目すべきだと強調し、経済学教育の抜本的な改革が必要であると主張した。

講演には、大学教員や研究者、民間企業で働く社会人に加え、高校生や大学院生など幅広い層から対面およびオンラインで 100 名以上が参加しました。質疑応答では、「今後の日本企業のあるべき姿」や「革新的企業の理論と大企業の理論の違い」について活発な議論が交わされ、予定時間を 15 分超過するほどの盛り上がりを見せました。

